

AA

日本ニューズレター No.84

21世紀の初年度、2/10(土)~12(祝)の3日間、東京で開催されるAA日本評議会のテーマは、本年度評議会の席上で「サービスと献金」と決定されている。また本年4月には、第1回の全国サービスフォーラムが、このテーマに積極的な関心を抱き、その具現化から詳細報告書の作成に至るまで、全ての面で実質的主催者としての働きを受け持っていたいただいた、中部北陸地域実行委員会メンバーの熱意と協力があって実現されている。

次回フォーラムの開催についても、それに向けての諸活動の推進を、常任理事会から小委員会活動として正式に委任し、それを快く受けていただいた、20数名を数える北海道地域実行委員会メンバーの協力で着々と準備が進められている。

こうした動きの中に実際に身を置かせていただき、さらに「AAニューズレター81号」で伝えられた第1回フォーラム参加者の声を通して、このテーマに対してメンバーが抱く強い関心と今後の展開への期待感と共にその背景に存在する、日常ミーティングやメッセージ、地区、地域、全国レベルにおけるサービス活動の中に、今後、数多くの意見をぶつけ合いながら考えて行くべき数多くの問題が感じられてきているのではなからうか。

そこで、試みに、自分自身がAA共同体の中で伝えられ、感じ、実際の行動の裏づけとして大切にしているのではないかというものを、ここにまとめてみることにした。今後、評議会やサービスフォーラムに向けて、各グループ、地区、地域、常任理事会、その他の多くの場面で展開されるであろう数多くの論議の叩き台としてこれが一考されれば幸いである。

「サービスと献金」を巡って感じていること

メッセージとソプラエティ :

メッセージを伝えることは、AAグループの唯一の目的。メッセージを伝え続けることは、伝えた人それ自身のソプラエティに役立つ。AAメンバーは、協力し合う必要性を感じ、それぞれのグループに身を置く。

メッセージを伝える上で一番役立つもの、それは自らが一人のアルコールリックとして体験し、感じてきた自分自身の思いである。不思議なことは、自分自身の話をして限り、まだ苦しんでいるアルコールリックに対し何らかの希望の光が伝えられる。

サービスとは何 :

サービスとは、メッセージを伝えるために役立つすべての活動を意味している。

新しくAAにやってくる人を暖かく迎えるために、会場に椅子を並べ、コーヒーを沸かし、後片付けをする、日頃のミーティングを支えるメンバー一人一人の活動 ; それを継続、発展させて行くことを目的とした、グループ、地区、地域、全国レベルでの話し合い ; 各メンバー、各グループの

第5回AA日本評議会テーマ「サービスと献金」について考えよう

常任理事会議長 小泉

協力があって初めて実現される、各種セミナーやラウンドアップなど一連の催し、フエロシップ ; そうしたことを広報し、様々な問い合わせに答え、適切な情報連絡業務を担う地域オフィス ; メッセージを伝えるために役立つ書籍、印刷物の発行、病院や施設さらには一般社会との間の相互理解を深めるなど、AA日本全体に関係するサービス活動をより善い形で計画、実現して行く役割を担う常任理事会、その窓口となるJSOなどすべてが含まれ、それぞれが互いに重要な役割を担い合っている。

権限委譲の必要性 :

こうしたサービス活動を計画し、推し進めて行くことに、自分自身の意見を述べる権利、様々な活動に参加する権利は、全てのメンバーに保障されている。その一方で、常に全てのメンバーが集まり、話し合うことは不可能であり、そうした役割を担う人を選び、メンバーの意見を集約して考え、伝え、決定して行く、責任と権限とを同時に委ねることが必要となってくる。

各地域集会、地域委員会、評議会、常任理事会などの場で役割を担っている代議員、地域委員、評議員、常任理事は、そうした責任と権限とを委ねる存在として選出される。また、オフィスで働く人々や実行委員会メンバーとして活動する人々には、それぞれの特定のサービス活動を実行してゆくために必要な責任と権限とが与えられている。

献金、それは特権 :

メンバー自身やグループが行うメッセージ活動と同様に、それを支えるサービス活動にも、時間とそれなりの費用を必要とするものが生じてくる。そうした費用は直接活動に携わるメンバーのみで負担し切れるものではなく、また、そうするべきではない。

献金は、アルコールリックのみに許されている特権である。

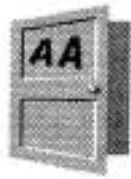
献金するか否か、またどこに献金するかは、メンバー個人、またはグループが自由に選択できる事柄である。

輪番性その他の事情で、サービス活動に直接参加できないメンバーにとって献金は、その役割を仲間に委ね、支えて行く意思を表す手段である。

献金は、自分自身および仲間にもたらされたアルコールリズムからの回復、一人の人間として今生きていることへの感謝の気持ち、喜びの気持ちを具体的に表す手段でもある。



献金



私がAAミーティングに初めて出席した
 当時を思いだしている。

会費も月謝いらぬというのに、何故か
 コーヒーにお茶、カップにポットがあり、
 自由に飲めるようであった。ところがその脇に献金と書か
 れてある指が置いてあったのである。

初めての私にとっては、遠慮して飲まないというよりは、
 コーヒーを飲むことによって、なにがしかお金を入れなけ
 ればならないような思いのほうが強かったのであろう。献
 金はしなかったが、コーヒーも飲まなかった。

その時、考えていたのは、ミーティングの帰りに一杯の
 酒を買うことで、そのことがなによりも大切だったのであ
 る。

お蔭様で3回に及ぶ貴重な精神病院の入退院を経験する
 ことになった。

そして、最後の退院後にお世話になった中間施設におけ
 る、毎日通い続けたミーティング会場で聞く事ができた多
 くの仲間の話から、一步步回復の道を歩んで行くことが
 できたのであろう。

時間はだいぶかかったが、どうやらミーティング場に置
 いてある献金箱の意味も、わずかながら理解することがで
 きるようになった。

自分達のグループを維持するためなのだろう、その為に
 献金をするのだ。わずかのお金ではあってもその時自分が
 できるだけの献金をと、最初の頃はこのくらいしか理解す
 ることができなかった。しかし、私は中間施設での生活が
 終わりの頃、幸いにも現在の職に付くことができたのであ
 る。

この事は、私の回復への人生を大きく変えることになっ
 た。もちろん、私一人の力ではなく、中間施設の担当職員
 やその他の職員の提案、アドバイス、当時一緒に生活して
 いた仲間達の大きな力があつたからこそである。

さらに又、現在はオールドタイマーと呼ばれている方々
 とのミーティング会場や、様々なフェローシップの中で親
 しくしていただき、それぞれにお互いを信頼し合えたこと
 が霊的成長へと向かうステップに必要な不可欠であったと、
 今でも確信している。

その後、AAの役割分担を実行させてもらうなかで、こ
 のサービス活動を通して「献金」の大切さや、「献金」が
 どのように使われているかが、どうやら、自分の中で理解
 できてきたのである。そして地区委員会、地域委員会での
 サービス活動や、関東甲信越セントラルオフィスの設立に
 も参加することができ、またGSMとそれに続く全国評議会
 にも関わりを持つことができたのである。

初めてAAグループに参加した当時を思い出すと、あら
 ゆる種類のパンフレットを無料でもらっていた。そのころ
 はごく当たり前のごとくもらい、自分が必要でなければ捨
 て、ときには破ってさえた。

この大変なことに気付かされたのである。自分が破り捨
 てていたパンフレットのの一つ一つ、これがメンバー一人
 一人からの献金によって支えられていたものである事や有料
 の頒布にやっと気が付くことが出来た。

グループの献金箱から献金されたお金は、まだ苦しんで
 いる仲間達の回復への手助けのために使われる神から与え

られた大切な献金である。

残念ながら人間とは、様々な艱難辛苦を含め色々な経験
 をしてみなければ分からないものだと思う。そして、でき
 る事といえば自分の経験を伝えることだけなのだと思えら
 れた。

個人献金とは、良く考えてみると、ミーティング場の献
 金、サービス委員会、フェローシップ、ラウンドアップ等、
 書籍の購入も全ての献金は個人から出てくるものである。
 今、新しいAAメンバーが毎日のようにミーティングに出
 席し、出きるだけの献金をしていると思う。しかしながら、
 回復年数が増し、落ち着いた生活を送っているAAメンバ
 ーのなかには、ミーティング場へ足を運ぶ回数が減少して
 いるように見える。もちろん、社会の中での責任も増して、
 時間の余裕が少し足りなくなっている事も事実であろう。

確かに、飲酒への不安もなくなり生き方は楽になるのだ
 が、足が遠のけば、その分献金の機会も減少するのではな
 いだろうか。

私もその中の一人である。仕事の時間が優先されてしま
 うので、なかなかミーティングには参加できない。とはい
 え、アルコールクである事には変わりはないので、出席
 できたミーティングは大切なものとなる。そして、個人献
 金をセントラルオフィス、J S Oへ欠かさずに届けること
 を、感謝の一つとして実行している。

13年前に中間施設の担当職員の方がオフィスへの個人
 献金の必要性を熱心に話されたことに感動した。ちょうど、
 私が職につき、一年経過したころのことだった。ミーテ
 ィング場での献金とは別に、オフィスへの個人献金がどう
 しても必要だという話ですから、半信半疑、なんだかよくわ
 からないことではあったものの、とにかく、その時は感動
 したのである。

この頃、ある機会に、私の家族、父、弟、親戚が、更
 には檀家寺の住職、友人達が、この私の酒が止まり、さら
 に職につき勤めるなどということ、とても信用できるかと
 いうような顔をしていたことを思い出した。その時、「よし！
 できる所までもやってみよう。」と考えた。

今日一日の生き方を続けた結果は、確実に経済的にも回
 復する事ができ、社会的にも責任ある職務まで与えられる
 事につながっていった。どれだけ感謝しても足りないこと
 とは思いますが、一つずつ返して行く事だと考える。

AAの役に立つと思う、どのような小さな事でも、自分
 に出る精一杯をすること。目立つ必要もないし、出来な
 くても嘆くこともない。

善を為なせば必ず我に返ると信じている。

《AAは回復したアルコールクが実際に活動を続ける集
 合体である》

知恵のある人は知恵の献金、時間のある人は時間の献金、
 お金のある人はお金の献金、これは、AAと出会った頃長
 く耳にした。

毎日各オフィスには、助けを求めるアルコールクが、
 直接又は電話等でやってくる。AAの愛の手が届けられる
 様、資料を手渡したり、送付したり、様々なサービスが用
 意されている。

もちろん、医療、福祉、行政等の関係機
 関にも同様に間接的なサービスを行なっ
 ている。職員達は毎日目まぐるしく、ハード
 スケジュールのなか、昼食をとる時間もな



いような時さえあるようだ。勤務時間の超過も有るのであるが、泣き言も言わず一生懸命はたらいている。私は、職員たちに一般社会人と同様の生活補償をしていくのが、A Aグループ全体の責任であると考え。

**メッセージを運ぶときに一冊の書籍のプレゼントを！
定期的な個人献金を！**

A Aが存在していくためには、回復、一体性、サービスがどうしても必要である。そして、A A全体がその役目を果たしていく為に必要なサービスの一つの形として個人献金があると考え。

常任理事（企画、J S O担当）
高橋



2000年度北海道地域

ラウンドアップを終えて

2000年度北海道地域ラウンドアップは9月1日（金）～3日（日）に渡り、登別温泉で開催された。170余名の参加者が集い、盛況の内に終えることができた。私も実行委員の一人として、その運営に関わり、忙しいながらも充実した時間を過ごすことができたと思う。

今年の北海道は、長引く不況と有珠山噴火の影響でなんとなく暗いイメージがあったようだが、A Aのフェローシップはその影響を受けていないものの一つだったようだ。実行委員会内では、開催地が有珠山に近いこともあり、参加人数は100名程度になりそうな予想もあったのだが、最終締め切りの報告を聞いて、例年よりも20名以上も多い参加数に驚いてしまった。ラウンドアップの中にはいろいろなプログラムを盛り込み、メンバーが分かち合える時間を多くとるようにした。ミーティングも何種類かを取り入れ、日中でも多くのメンバーが参加して盛り上がりを見せていた。（雨の影響も大きかったようですが）

その中に「常任理事とのQ & A」という枠を入れ、私が担当して「サービス」についての分かち合いの時間を持つつもりであったが、残念なことに事前に配布していたサービスに関するアンケート用紙には一通も返信がなく、当日になって心優しき2グループの仲間が書いてくれただけであった。それ程集まるとは考えてはいなかったが、一通も返ってこないとは思ってもいなかったのが、急遽アンケートに変わるテーマを用意することにした。

ある晩実行委員長から電話があり、今月のBOXを読んだかという。その中に『笑い事ではすまない話』という文章があるから、その内容をテーマにしてはどうかという話であった。

忙しさにかまけて放り出してあったBOXを早速開いて見ると、4月に開催された名古屋の「全国サービスフォーラム」会場での一コマが書いてあった。15年前A Aメン

バーは3,500人とされていたが、・現在もおおよそ3,500人ぐらいだろうという話に会場は笑ったがメンバーが定着し増えてこないという事実は、A Aそのものと私たち自身の命の存続にかかわること“何処かで何か機能が不全しているのでは”とも書いている。

実は私もその会場にいて、確かにその話も聞いたし笑いもした。決して愉快的な笑いではなく、どちらかというと苦笑に近いものだったように記憶している。

A Aの書籍にはある時期にもものすごい数のメンバーが増え、A Aが社会的に認知されていく旨の文章があり、こんなふうにA Aが広がっていくのだらうという思いを抱いていたこともある。だが現実には15年前と変わることのないメンバー数なのだ。

早速このテーマを取り入れ、常任理事の方々に個人の話も交えながら意見を聞かせてもらった。結論的なものを出すことはないのだが、やはり今後も引き続き考えていくべき事柄であることは間違いのないことだろう。

私がA Aにつながった時、この病気は100人に1人が2人しか回復しない病気だと聞いた。事実、同じころにA Aに通い始めた仲間たちも何人も残ってはいない。自分自身がそのことに甘えというか、あきらめがあるのではないかと思う。A Aから離れて行った人達に対して、A Aの門をくぐろうとしない人達に対して、それはすべて本人の責任なのだと言い切ってしまうことができるのだろうか。

「ベストオブビル」の中で彼は、自分やA Aを伝えるメンバー達の傲慢さや自意識過剰が、新しく来る仲間たちのやる気をなくしてしまう話が載っている。私自身のことを振り返ってもあてはまることが多く、飲まない時間が増えるにつれ、新しいメンバーに対する謙虚さや思いやりが失われていっていたような気がする。つい最近もやってしまったのだが。

最後に、ラウンドアップに参加して下さった多くの関係者、仲間の方々に感謝します。至らない所もあつたでしょうが、本当にありがとうございました。

2000年北海道地域ラウンドアップ 実行委員

第一回全国サービスフォーラム報告

会議、討論内容のテープから起こした報告書ができました。

編集委員会の大変なご苦勞のもとに出来た172ページに及び興味深い内容の文書となりました。出版はいたしません、各セントラルオフィスに原紙として二部送ります。

関心のあるメンバーは、どうぞ各セントラルオフィス、あるいはJ S Oへコピーを申し込んでいただきたいと思います。

内容の要約や整理そして修正は時間が非常にかかる作業となることが見込まれ、現在のJ S Oのサービス業務の中では、困難であると判断しております。

（一度読んでいただいたメンバーの中でまとめてみたいと思う方は、どうぞご連絡ください。）JSO

AA

みちのく歳時記

2000年東北ラウンドアップ in 山形は9月23・24日に開催され盛会のうちに終了することができた。初めてラウンドアップ開催を経験する山形グループ、そして経験を伝える宮城地区のメンバーを中心につくられた実行委員会、それはグループとグループの垣根を越えたフェローシップとなり、力強いスポンサーシップの成果となった。そしてその成果に応え、参加してくれた全国の仲間の熱意と協力に心から感謝の意を表したい。

東北地域はかつてはみちのくとも呼ばれ、後発地域の代表のように言われた時代が長かったところである。広大な面積に加え農業中心の生活が他の地域の人々から見ればそう見えたのかもしれない。「白河以北一山一文」という感覚はバブルが弾けた現在でも多くの人々の思いの中に潜在しているのではと考えることもある。ひがみ根性だと笑われるかもしれないが、三代丸山遺跡の発掘による東北の文化への関心の高まり、自然と共生することの大切さが語られれば語られるほど、後発地域の名で呼ばれたみちのくの地への愛着を感じる。(これもひがみかな?)

AAがこの東北の地へ伝えられグループが発足したのは1983年2月26日である。日本のAA発足に遅れること8年、宮城県仙台市に柏木グループ、として産声を上げたのが最初である。その後福島県にいわきグループ、安積野グループ(郡山グループの前進)、双葉グループが誕生し、私が現在ホームグループとしている盛岡グループの発足へとつながる。詳細は「AA日本20周年の歩み」を参照願うこととして、この20周年の時点での東北地域全体のグループ数は18グループであったが、それから5年を経た25周年の今日は29グループを数えるに至っている。

北から青森に2グループ、秋田1グループ、岩手4グループと二つのミーティング(うち一つは日・英2カ国語ミーティング)、山形は2グループと1ミーティング、宮城13グループと1つの女性ミーティング、福島7グループと1女性ミーティングがあり、一週間に52会場で62回のミーティングが行われている。確かに数字にあらわれた限りではその伸張はめざましいものがあるが、その内容には若干の問題もある。

各県別のグループ数のこの5年間の推移を見ると、減少した県は4グループが2グループとなった青森だけであるが、宮城の13グループの中には、旧仙台グループがサービスの活性化を目的として会場単位に分離自立した5グループが含まれており、実数イコール増加とはいえない事情も加味しなければならない。しかし東北地域の長年の懸案であった日本海沿岸の最後に残された秋田県については、秋田の病院にメッセージを運び続けた青森の仲間と秋田の仲間の熱意と努力でグループを立ち上げることができ、東北6県すべてにAA

サービス活動の拠点が展開されたことは大きな足跡であり、東北に住むまだ苦しんでいるアルコールリズムの仲間たちに一歩近づいたという喜びがある。

5年という時間が長いのか、短いのか人夫々が抱く想いの中にあることであるが、私にとってどうだったのか考えることがある。若い仲間が増えている、女性の仲間も増え積極的にサービスに関わってきている。そして何よりも大きな変化は国を越えた、人種を越えたグループが東北に生まれ、日本の仲間とともにAAのサービス活動をはじめたことが挙げられる。

私が日本の仲間以外のアルコールクとミーティングの機会を与えられたのは、青森の三沢にある米軍基地内の三沢グループであったが、そのグループのミーティングに青森の仲間が加わり、また三沢グループが主催するイベントに宮城の仲間が加わるようになって、日本国内にある外国といわれる米軍三沢基地を中心に、AAのフェローシップの輪は次第に広がりを見せはじめた。

ハイパーパワーの配慮なのか、AAのもつ、ひきつける魅力なのかは定かでないが、そういった国と国、人種と人種を越えたAAの原理が、日本に住むアルコールリズムに苦しんでいる外国の仲間たちへの風になり、グループの立ち上げにつながったのではないが、それが宮城における二人のイギリス人メンバーを中心とした大崎ビクブクグループの発足につながった部分もあるのではと思っている。現在私の住む盛岡にも、まだグループとして立ち上がってはいないが、盛岡在住の外国人による、週2回の日本語と英語によるバイリンガルミーティングが開かれており、宮城、三沢、そして関東の外国人グループ間のフェローシップの輪が広がっていると聞いている。また大崎ビクブクグループが発足以来開催しているミニラウンドアップには、宮城をはじめ全国各地の日本のメンバーの参加も増え、年を追う毎に盛況になっていると聞く。

しかし東北の抱える問題は多い、他の地域でも同様の問題があるかと思うが、1地区に1ないし2と広い地域に点在しているグループとのフェローシップ、地域全体サービスをすすめていく上での一体性の存り方、広報に於ける情報精度の向上、矯正、病院、関係機関へのメッセージ体制の確立など、より具体的な行動指針が求められているが、これまで以上に長い時間とメンバーのサービスへの奉仕と知恵が必要とされる。AAの「愛の手」によって救われ、生かされている私たちが出来ること、それはメンバーひとり一人が、まだ苦しんでいるアルコールクに「愛の手」を差し伸べ続けることに尽きる。奉仕と犠牲、それが全体サービスの原理なのだろう、難しい事ではあるが。

以上

東北地域 原

AA日本ニューズレターNo. 84

編集・発行：AA日本ゼネラルサービスオフィス(JSO) 〒171-0014 東京都豊島区池袋4-17-10 土屋ビル4F

TEL:03-3590-5377 FAX:03-3590-5419 ホームページ：<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/aa-jso/>